



信を通わす

13 リレーエッセイ

文明批評の実践 次世代へつなぐ 草刈り十字軍運動



NPO法人農業開発技術者協会・農道館理事長
草刈り十字軍運動本部代表

足立原 貫氏
あだちはら とおる

天然の森林でなく、苗木を植えて育成する人工の森林では、毎年適切な時期に何らかの人手をかけねばならない。その一つに、成育初期の「下草刈り」の作業がある。

各地の造林地で作業者が激減し、

除草剤の空中散布が始まっていた1974年(昭和49年)夏、富山県でも4カ町内の造林地で除草剤が空中散布されようとした。散布対象地域内の廃村で、その7年前から「地球を耕そう」を合言葉に、独自の営農活動とともに、土とつながる生存条件と生活価値の探究をめざす「人と土の大学」の開講などを続けていた私たちは、猛反対運動に立ち上がった。反対運動の極め手は〈対案〉を提示して自らそれを実践することである。「チエをかしたらチカラもかそう」という私の信条に共鳴してくれる人手による「草刈り十字軍運動」の開始であった。

以後毎夏、全国から参加者を得て運動を継続し、今夏で37年目を迎えた。参加者延べ3万2千人余、作業面積延べ1800ha余。数字が示す

森林業務への直接的寄与は大きくあるまい。しかし、住民運動の流れを変え、森林ボランティアのさきがけとなったと評価され、林政の多面的見直しを促した「起爆剤効果」は小さくないであろう。

除草剤空中散布が実施されなくなった今、運動の歴史的使命は終わったとみるのは皮相的過ぎる。参加者の年齢の幅が広がり、若者だけでなく50〜70歳代にも及ぶ。こういうコトがなければ出会いもしない、世代も生活スタイルも考え方も異なる人たちが、それぞれの日常性を脱し、力を寄せ合い励まし合い助け合う。一つの目標に向かって厳しい労働に汗を流す合宿は、互いの心の底にある善意や良心をめざめさせ、〈我利〉を超え、他者のためにも力を尽くそうとする人物をはぐくむ場となる。「教育の城は山に築け」「青春の一夏、山へ入って草を刈ろう」の呼びかけで開始した運動は「何かしなければ」との思いを抱く勇気ある少数派の人物像を映しとりつつ、手ごたえのある文明批評の実践であり続けるであろう。